

****第四章【結】****

アルルクシル・ディアウスは誇りを重んじたという。

それ自体は珍しい話ではない。誇りを重んじるというだけなら、アルルクシルは世に数多溢れる英雄と同じ存在だ。

アルルクシルがその者達と異なるのは、彼が無能だという点である。

英雄たちは有能だ。それも尋常ではなく有能だ。

それは英雄の誇りが、所詮有能さという力の裏付けあつての誇りである事を意味する。ところが、アルルクシルは無能である。彼の誇りには裏付けがない。

より純粹なる気高さに満ちた男なのだ。

無論、かつてはアルルクシルもその誇りに似合った力を手に入れようとした。

少なくとも、十代の彼は高き志を宿していたし、二十代の彼にはその残り香があつた。

そこで彼は躓き、挫け、負け犬となる。そして、それ故に彼は数多の英傑たちとは違う境地に辿り着く。

——では、弱い者は誇りを持つてはいけないのか？

そうではない。そうではないはずだ。

力なき存在でありながら、その宿命に逆らおうした存在——それが人間ではないのか？

ここに着目すべき挿話がある。

『かつてのヒトの祖は現在の猿と同じく樹上での採集生活を営んでいた。だが、ある時、二本の足で平原に降り立ち、狩猟生活を始めた』

幼子でも知りえる進化論の概説である。だが、厳密な表現でない。

工学的には、二本の足で平原に降り立ったばかりのヒトの祖に、いきなり狩猟生活が出るか否かが、極めて疑問である。二足歩行という低速な移動手段と未熟な道具しか持たないヒトの祖が、平原を高速で駆け回る獣を捕らえられるかと言えば、これは不可能と言う他ない。

また考古学的に考えれば、ヒトの祖が二本の足で平原に降り立った時期は、その地帯の大乾燥期と一致する。当時は森林から草原へ、草原から砂漠へと変化するばかりの極めて厳しい状況だったはずだ。不可思議な事に、ヒトの祖はわざわざ最も困難な時期に旅立ちを敢行したのである。

これは何を意味するか？

——旅立ちではなく、逃げだったのだ。ヒトは進化したのではない。人間へと逃避したのだ。

アルIIイクシルはそう断言したという。

砂漠化が進むと樹上での採集生活は難しくなる。食料が少なくなるからだ。力なき猿は、力ある猿に、森から追い出されただろう。無能ゆえに力なき猿は、逃げ出すしかなかった。具体的な展望はなかったか、あったとしても、的外れなものだったろう。誰もが真っ先に思いつく狩猟は前述の通り工学的に不可能だからだ。

だが、力なき猿は生き残って、ヒトとなった。

当時、砂漠化の影響か、平原には死骸がゴロゴロしていた。無論、その死骸には一片の肉も残っていない。何しろ、より足の速い有能な他の肉食獣が先にその肉を貪るからだ。しかし、骨ぐらいいは残っていた。そして、ヒトはそこから脊髄液などの栄養を摂取することが出来た。火をも扱える器用な手先があった故であり、事実現在でも同様の生活をしている民族が存在する……（※1）。

そう、力なきが故に枯れ行く森から追放され、未知なる草原に降り立たざるをえなかった存在。

——それが【最初の人間】だったはずだ。

その悟りに到った時、彼は本当の意味で《アルIIアールム・ムラート・アブヤド白衣の賢者》となったのである。七つの時に会って以来、彼の心を常に捕えて放さなかった《アルIIシャイターナア・カバ・アズワド黒衣の魔女》——彼女との決別であり、彼女からの逃避であった。

彼が彼女を初めて超克した——正に覚醒の時であった（※2）。

……私はアフリカ大陸のいくつかの神話を髣髴とせざるを得ない。

この人類発祥の地における『神去り』型創世神話には興味深いものがある。

例えば、ロジ族の神話において、人類は《ニャンベ》と呼ばれる創造神（※3）によって、森羅万象の弥終いやはてに生み出されたという。

だが、その【最初の人間】はニャンベの創った他の作品とは明らかに異なっていた。【最初の人間】には知恵があった。探究心があった。【最初の人間】はその頃、まだ地上に留まっていた創造神ニャンベがやることなすことを真似したがった。そして、ニャンベの行いを悉く、模倣し、習得していった。ニャンベは【最初の人間】を疎んだ。【最初の人間】はどんどん賢くなっていく。【最初の人間】の知恵は膨れ上がり、好奇は止まることを知らない。おまけにニャンベの命令を徐々に受け付けなくなっていく。ふと気が付けば、最早、ニャンベにできて、【最初の人間】にできないことはほとんどなくなっていた。ニャンベが【最初の人間】を煩い、ある島に隠棲したら、いつの間にか覚えたのか、【最初の人間】は船を創って追いかけてきたくらいだ。ニャンベは【最初の人間】を恐れた。いずれ、この被造物は神なるニャンベと等しくなるだろう。このままでは自分は追い越されてしまうかもしれない。そこで、ニャンベは【最初の人間】から逃れるために遙か天空の彼方に去った。こうして、大地に神はいなくなった。だが、【最初の人間】は諦めなかった。だから、人は

神を追って、天まで届く塔を作った……。

すなわち、創造主の模倣者にして駆逐者——それこそ【最初の人間】なのだ。

生みの親である神に抗っても、真理を求めた反逆者——それこそ【最初の人間】なのだ。

そして、この【最初の人間】の名は《カムヌ》——奇しくも彼が手にした藜杖の銘と同じであった。

* * *

※1…アルルクシルよりも人文科学的な私としては、迫害され続けた弱小民族であったユダヤ人がやむをえず金融業を営むことになった経緯、あるいは革命に敗れた民が狭隘な《宋》の地に封ぜられた故に、当時賤業とされていた交易を営み『商人』となっていく過程を付記したい。

※2…価値観そのものの転倒——劣等感や価値観の転倒と呼ばれる境地へ辿り着いた者は《地球》にも多い。

※3…《ニャンベ》はおそらく《ニヤメ》や《ナナ・ニャンコポン》等とも同系であり、天空神、至高神、全能神としての属性も併せ持つ。

アブー||ヌエ・フウルウ・アル||ピヤオ著『白衣春秋』より抜粋。



「閣下……！」

咄嗟に《緑》は倒れかかったアールウマイヤを支えていた。

「少し休まれた方が……」

「……睡眠は勝利の後にとります」

「しかし、もう何日もまともに……！」

「そもそも、発言を許した覚えはありませんが？」

「……はっ」

やむを得ず、一礼して《緑》は引き下がる。

そして、アールウマイヤは何事もなかったように書類に向う。

——軽かった。あまりにも……。

少女を支えた時の手ごたえに《緑》は苦悩した。

おそらくアーシルウマイヤは睡眠だけでなく食事もまともに取っていないのだ。そうではなくては、いくら小柄な少女とはいえ、あんなに軽いはずがない。

テイルナノグ連合軍の本陣を割り出したのは単に彼女の力だ。

敵の目的が焦土作戦による兵糧攻めだとわかった後、アーシルウマイヤは大量の偵察を全方位に放った。初めのものと異なり、部隊当たりの数も部隊そのものの数も大幅に増やした上だ。

そして、彼女は彼らがもたらした情報を（未帰還ならば、未帰還という事実を含め）すべて一人で分析し始めたのである。

当然《緑》は諫止した。何のために自分達のような中堅官僚が派遣されているのか考えて欲しい。偵察兵からの報告など、自分達が分析する。その上で、特に必要だと思われる情報をアーシルウマイヤに上申する。それで充分でないか——と。

だが、アーシルウマイヤは首を振った。諸君らの職務への誇りを傷つけた事は謝罪（！）する。だが、この情報分析は個人で集中処理せねばならない。複数の人間が関われば、それらの情報を統合する過程で必ず齟齬が生まれる。それを避けるには誰かが一人やらねばならない。そして、それは最高指揮官たる自分が最も相応しい。

勿論《緑》は反駁しようとした。だが、『命令』の一言があれば、黙らざるを得ない。

本当は叫びたかった。問題は貴女への負担なのだ——と。

元々、アーシルウマイヤは過労気味だった。朝は早く起き、夜は遅くに寝、二十杖を超える刑罰は全て自ら決裁し、常に最下級の兵士と同じ食事を取り、その上で兵糧には細心の注意を払っていた。

だからこそ、こんなにも兵站線が長く、補給線を乱されている状況でありながら、兵士の栄養状態は未だ十全なのだ。

しかし、ここでさらに大量の偵察が持つてくる大量の情報を一人で処理しようとするれば、アーシルウマイヤにかかる負担は尋常ならざるものとなる。

……実のところ《緑》は彼女を娘のように思っていた。この若さ、しかも奴隸身分で一軍を率いるとなれば、周囲のやっかみは避けられない。だから、参謀を拝命した時、自分がこのどこまでも勤勉な少女の盾となろうとすら思った。

「言っておきますが、あなたたちには十分な休息を取る義務がありますよ。私が過労死したらなら、それこそ、あなた達の出番ですからね」

——…それがこの有り様だ。

「では、全軍に通達」

苦悩は玲瓏なる声に遮られた。

『これより略奪・強姦の類は厳禁。違反者は即座に斬首にする』

『決戦に集中し、愉しみは勝利が確定した後まで取っておきなさい』

『敵は金銀の類を身につけ、また女を軍に入れてい
『繰り返す。勝ってさえしまえば、より取り見取りよ——大いに励みなさい』

第一文で安堵した《アルトアクラタル緑》であったが、続く第二文以降で愕然とする。
「いけません。これでは勝利後の略奪・強姦を許容……いえ、奨励していると思われ
ません」

「だとしたら、何か？」

透徹したアーシルの物言いに一瞬怯んだが、しかし、毅然として反駁する。

「戦後統治に差し障ります。いえ、そもそも軍規の乱れに……」

「これは戦後統治のためでもあります。これまで帝国は現地住民であっても協力者には
『餡』あめで報いてきました。ならば、この期に及んでも敵対する者には、徹底した『鞭』むちで
いねばなりません」

「しかし……」

「この際だから、言っておきましょうか？」アーシルはやや呆れ気味に言葉を重ねた。「そ
も既に本土の人口は過密気味です。故に原住民の人的資源は必要としていないのです」

「そ、それは……」

——最終的にテイルノグ人を『絶滅』させた上で、アツザフル人を『移民』さ
せる。……いや、そもそもこの『移民』そのものが『絶滅』を……。

そこでアーシルは口を噤んだ。

「世界は弱肉強食。とはいえ、所詮は相対的なものです。あなたが考えているほど極端な
形になるとは限りませんよ」

「は、はい……」

「それに軍規の乱れとは言いますが、我が軍の兵士は補給の乏しい遠地でよくやってきた
のです。ならば、報酬を与えてやらねばなりません」

「……原住民の財産がその報酬ですか？」

「我が軍の物資残量は、担当者であるあなたの方がむしろお詳しいのでは？」

「……意思ではなく、能力の問題である——と？」

「おや、あの男の影響でも受けましたか？」

アーシルウマイヤは目に隈を作りながらも、心底興味深そうに尋ねた。

会戦は予想通りの推移であった。

アルイクシルが下した命令は『凸型の魚鱗陣形を死守。一丸となって中央脱出』とい

うものだ。

ボウディツカは『そういう時、普通は中央突破と言わないか？　というか、敵の中央に向かうのなら、それは敵の中枢に向かうのと同じであり、この際、敵の指揮官を……』と言いだしたが、即座に却下した。余計な事を考えると速度も鈍るし、詐略にはまる。

プラスは『脱出成功後は？　その場合、敵の裏側に回り込んでいるのだから、逆包囲の好機……』と言いだしたが、これはさらに強く却下した。脱出後はそのまま全力で逃避すべし、理由はボウディツカの時と同じである。

これに関して、アルリックシルは正直、

——二人とも若いな。

と思った。生きるか死ぬかの戦場で、前線の兵士にかかる負担は尋常なものではない。その負担を軽減するのが指揮官の義務であり、それ故、下す命令は極力単純明快なものあるべきだ。

これは下っ端時代の長かったアルリックシルらしい判断といえる。ボウディツカやプラス、もっと言えば、アーシルウマイヤと一線を画すところだろう。アルリックシルも会戦の指揮など初めてであるが、

——上の指示が複雑だと、下の負担が甚大になる。故に命令は簡素たるべし。

という自身の人生哲学は応用可能だと考えていたし、また実際その通りであった。

特に今回は味方の兵士の錬度も低い。繰り返すが、個人的な武勇はともかく集団戦法は未熟極まりないのである。おまけに連合軍⇨寄せ集め⇨烏合の衆だから、命令系統がまるですべて整っていない。

——素人同然の兵士達、完全素人の指揮官、信用できない命令系統。これで複雑な奇計奇策を弄するは自殺行為だ。

だから、連合軍には凸型魚鱗陣形しかない。

反面、帝国軍は変わらず凹型鶴翼陣形のままだ。

前述の通り、この手の凹型鶴翼陣形は兵力が分散してしまう。だから、各個撃破の対象となりやすいし、情報伝達にも支障をきたしやすい。その上、指揮官の守りが薄くなる。左右の翼が完全に包囲を終える前に、指揮官のいる中軍が破られて、全部おしゃかにもなりえる（だからボウディツカの意見も確かに一理あるのだ）。

賭博性の高い陣形でもある。

しかも、普通は包囲にわざと隙を作り、相手が『死兵』となるのを避けるところを、今回ははつきりと包囲殲滅を狙ってきている。

どうもこちらの作戦が予想以上に痛打であったらしい。一兵でも逃せば、また、火付け盗賊で辛酸を舐める羽目になると考えているようだ。

——……過大評価されているなあ。

いや、それだけではない。

帝国軍には将兵共に『鶴翼』を使いこなせるという自負があるのだ。

「……こちらとは対照的だな」

内心の不安を誤魔化すようにアルⅡイクシルは呟いていた。

会戦は予想通りの推移であった。

テイルⅡナⅡノグ連合の進撃速度が遅くなってきているのだ。

夜明けと共にアルⅡイクシルは突撃を命じ、午前は帝国軍をぐんぐんと押し込んでいったが、午後になった頃には押し返される場面が増えていった。

最早、戦況は『一進一退』である。

だが、全軍突撃している連合軍と違い、帝国軍にはまだ遊軍がある。凹型陣形の左右両翼がまだ閉じ切っていないのだ。こちらは中央の一軍を相手にしているだけで一杯一杯なのに、この上さらに同規模の二軍に攻めてこられたら、戦況は一気に悪化するだろう。それも側面と背面から襲われるのだから、控えめに言っても絶望的だ。

だから、アルⅡイクシル達テイルⅡナⅡノグ連合軍は、一刻も早く眼前の敵陣を突破せねばならないのだが……。

——午前中、こちらが押していたのは、やはり向こうの畏だったな。

アルⅡイクシルは確信を一段と強めていた。アーシルⅡウマイヤは『肉を切らせて、骨を断つ』ために、わざと連合軍を帝国軍に食いこませたのだ。一瞬でもテイルⅡナⅡノグ兵士の剽悍さ故かもしれないと期待した自分は馬鹿だった。そして、意図的とはいえ、敵前で後退を敢行しても、なお、陣形を崩さず、士気を保っているアツザフル兵士の錬度には驚嘆するしかない。

「賢者様、ヴェニユティ族の三割がやられたそうです。撤退許可を求めて……」

「死守せよ」アルⅡイクシルはなるべく冷徹に言った。「選択肢はない」

「……はい」

不満げな容子を隠そうともせずに伝令は去っていく。

……果たして、あの伝令はわかっていたのだろうか？ 『選択肢はない』のは壊滅するであろうヴェニユティ族だけではない。既にアルⅡイクシルにもどうしようもないのだ。

当たり前だが、大方の戦いは始まる前に勝敗は決まっている。実際に戦端が開かれてから、指揮官にできることなど、ほとんどない。それが人類誕生より続く戦争の原則である。

ヴェニユティ族はボウディツカに臣従を誓っている勇猛な部族だ。アルⅡイクシルの指示にも忠実に従ってくれていた。

だが、そのヴェニユティ族がどのように蹂躪されるかも見当がついている。

密集したアツザフル兵は大盾を構え、前進し、長槍を投げ、前進し、曲刀で止めをさす。それだけだ。何の工夫もない。機械的な反復作業だ。

だが、ヴェニユティ族には——いや、このテイルノールグ連合軍のどの部隊であっても、対応ができない。装備と錬度が劣るとはそういう事なのだ。

数百数千の兵士が整然と集団戦術をとってきた時、それがどれほど恐ろしいか……わかっていても、どうにもならないのである。

その苦渋はボウデイツカも同じらしい。重苦しい沈黙の中、とうとう彼女は悪態をつき始めた。

「畜生、あたしの国を……！ ぶっ殺してやる。あたしのに手出しやがって……！」

——いや、まだ、あなたのものでは……。大体兵士の大半は他の部族からの借り物でしように……。

と思いつつも、アルイクシルはこの姫君が頂点に立つ島国の姿を想像せざるを得なかった。いや、そもそも『まだ』と考えてしまった時点で、アルイクシルにも願望があるのだろう。

「糞つたれ」いつもの様に蛮族の姫は毒づく。「見てろよ、あの気取った奴隷娘め。戦女神の宿る神聖樹の下でひいひい言わせてやるぜ。けけけけ。生きながらに乳房を切り取って、口に押し込んで、唇を縫い合わせて、またぐら股座を杭の上に突き刺してやるぜ。ひひひっ……多分。

どうも、ボウデイツカはアーシルの身を捕え、衣を剥ぎ、暴行し、拷問し、陵辱し、解体し、その上で死体を玩弄する様を脳裏に描き、色んな意味で興奮しているようだったが、彼女の言葉が途中で現地語になったために、アルイクシルにはよくわからない。

その時、肩に矢が刺さった。

「おいつ、賢者様！」

「っ！ ……いえ、問題ありません」

アルイクシルの肩には鈍痛が走っていたが、出血はない……はずだ。

「神御衣はこの程度では貫かれません。ですが、士気にかかります。どうか内密に」

「あ、ああ……とっ！」

ボウデイツカは相槌もそこそこに山刀で飛矢を叩き落した。

だが、矢は次々と飛んでくる。それを放つ敵兵の姿もそろそろ肉眼で確認できる程だ。

——どうやら、相当追いつめられてきているらしい。

アルイクシルは決断した。

「前線が押してきたようです。やむをえません。司令部は退いて下さい。第三合流地点で待機してくださいれば、さほど問題ないでしょう」

「……その言い方だと、あなたはここに残るみたいだが？」

「あなたも残存組ですよ。ボウデイツカ姫」

ここで《賢者》が引けば、士気に影響する。故にアルイクシルは残らざるをえない。

そして、口に出す勇氣はなかったが、この首級の最期の使い道を考えれば、ボウディツカにも残って貰わないと困る。

「この白衣で防御巫術を全開にすれば、しばらくは耐えられます。時機を見て、僕もそちらに合流するつもりなので。皆さんも速やかに撤退を」

「また、二人きりってわけか。……ところであたしはどうやって身を守るんだ？」

「それは勿論御自分の才覚です。言っておきますが、なるべく粘りますよ。ここで引き付ければ、その分、別働隊の成功率が上がります」

「言ってくれませ。……ほら、貴様ら、ボケっとしていないで撤収だ！」

ボウディツカが大声を張り上げると、司令部の人員は慌てて撤収を始める。

あのアンドラストも、アルリックシルに一礼した後、ボウディツカを一瞥し、立ち去る。

残ったのはアルリックシルとボウディツカの二人だけ……ではなかった。

何故か、三人目としてプラスも残っていたのだ。

ボウディツカが酷薄な目で少年を睨みつけた

「おい、プラス——王子様。さっさと逃げろよ。トロイんだから」

「……だ」

「こんな時にグチグチと何を言ってるんだよ。殺されてえのか、さっさと逃げろ」

「……嫌だ」

「何？ てめえ、誰に向かって……」

「姉さまをおいて逃げるなんて嫌だ。……姉さま、僕と……僕と結婚して……」

いきなり、プラスはとんでもない事を言い出す。

その時の事だった。

既にかなり近づいてきていたアツザフル兵の一人がこちらに石を投げた。

——あ、このままだとあの石は僕の頭に激突するな。

とアルリックシルはどこか冷静に認識した。

だが、生憎、身体への反応は追いつかなかった。

己の手で庇う暇もなく、頭部に衝撃が走る。

激痛と共にアルリックシルは倒れた。

見れば、石を投げたアツザフル兵士は自身の成功にむしろ驚いているようだった。その手には帝国軍の正規装備である槍や弩はない。気配からして巫術師でもないだろう。そもそも今回の帝国軍に投石部隊は配置されていない。おそらく、彼は何らかの事情で——おそらく場当たりのに——投石を使ったに過ぎないのだろう。

だが、返ってそれが功を奏したといえる。

アルリックシルを包む神御衣は耐刃耐熱に特化している。生半端な槍や矢、巫術は通さない。質量による素朴な打撃こそがむしろ防ぎにくいのだ。

——…アルⅡマーニウ、君の言葉もやはり一面の真理であったよ。なるほど、無制限の競争とはるくなものじゃない。

意識を失う間際、そのアツザフル兵の手に、着衣で代用した投石器（そうだ。わざわざ草を編む必要などなかったのだ！）が見て取れた。

ばさり——と護衛の兵士が倒れた。

アーシルが視線を向けると、本陣の隅には闖入者の影あつた。

東方系の男だ。

さらにその後ろに少数の部隊を引き連れている。

だが、その軍装は統一されていない。つまりは原住民の部隊という事だ。

周囲の幕僚たちに緊張が走る。

ここはアツザフル帝国軍の本陣である。だから、前線から離れた安全地帯だと油断していたのかもしれない。こちらは地理に不案内なのだから、当然あり得る事態なのに、これだから文官は——と嘆息していたら、アルⅡアツザフル《緑》が自分を庇うように立ち上がり、アーシルに己の偏見を戒めさせた。

「決死隊ですか？」

味方の動揺を鎮めるため、アーシルが声音を調べて訊ねる。

すると東洋系の——部隊長らしき——男が答えた。

「似たようなものだ」

「ああ、思い出しました。『九十九人抜きの子ーシュイ』でしたか？ その名は知っていますよ」

この時のアーシルは知る由もなかったが、この『決死隊』——アルⅡイクシルの指示した『別働隊』はチーシュイを隊長とし、かつチーシュイが直々に選んだ五十名の武人から成り立っていた。

その大半がチーシュイに一騎打ちを挑んで敗北したティルⅡナⅡノーグの者たちである。故に、チーシュイの命令になら従うという気風も備えていた。そして、兵士ではなく武人だ。個々の腕前は高いが、集団戦法には馴染めない者が多く、だからこそ、アルⅡイクシルも特例として、軍中からは独立させている。

ある意味、別働隊としてはもってこいだだったので、アルⅡイクシルは隠密潜伏させ、アーシルⅡウマイヤの殺害に向かわせていたのだ。

だが、ここに至るまでにその数は十名にまで減っていた。

チーシュイ自身も主兵装である槍は既に折れ、副兵装の黒錆びた刀は血糊で赤く色取られていた。

いかにその刀を振るってきたかの証だろう。

だが、ただでさえ、乏しい戦力をさらに分散させるとは……。

「ふふ。敗色濃厚ゆえに、一発逆転を狙い、危険な博打に出る。負け犬の典型ですね。これでは戦力が……」

「……戦力が逐次投入となり、各個撃破の憂き目にあう」

彼はその言葉を繋いだ。

「アルイクシル・ディアウスもまるで同じ事を言っていたよ。考え方もよく似ている——おそらく共に一人の女の強い影響の結果なのだろうな」

実に不快だった。

元々、アーシル（というよりもウマイヤの大半）にとって、アルイクシル・ディアウスは嫌悪すべき男だった。たまたま幼馴染だったというだけで、主人である《黒衣の魔女》と長い時間を共に過ごしてきた。それだけでも許し難いのに、何故か主人が過去を語る際には、常にあの《白衣の賢者》の影が付いて回るのだ。

——無能な上に、努力や敬虔といった美德とも程遠い下種が……！

そんな風に齒軋りした事は一度や二度ではない。

だから、その付属品であるこのチーシュイという男についても知ってはいた。

主人がこの奴隷男について語る事は希少であったが、幼馴染と縁がある以上は皆無ではなかった。そもそもアツザフルの世評では、三流探求士だったアルイクシルよりも、凄腕剣闘士だったチーシュイの方が余程有名である。

その経歴も含めて——。

そして、噂の数々は虚名ではなかったらしい。この戦陣を突破してきた事がその証だ。

アーシルは迷わず部下達に告げた。

「退きなさい。私が防ぎます」

「し、しかし」

「これは命令です」

理由は二つあった。

この戦、既に大勢は決している。帝国軍の勝利だ。極言すれば、ここでアーシルウマイヤが殺されたとしても、すぐ次の者に指揮権は委譲され、このまま押し切れるだろう。帝国の官僚機構は整備されている。連合軍とは違う。連合軍にとって、戦は王が倒れば、軍が総崩れになり、負ける。だが、帝国軍なら、戦で指揮官が何人倒れても、軍は代わりの者を指揮官にして、戦い続けることが出来る。まして、アーシルが任命した参謀たちな

ら、尚のことだ。自分がいなくても上手くやっていけるようにしてある。だからこそ、あの人材を大事にしたい。こんなところで失いたくはない。

これが一つ。

もう一つは貞淑——これこそが最大の理由である。

慎みを重んじるこのアーシルウマイヤが、主人以外の有象無象に、まして男の前で肌をさらすなど耐えられる事ではなかった。

だから、苛立ちを込めて呟く。

「抗命罪を適応されたいのですか？」

その一言に部下たちは一斉に退き始める。

最後には《アルリアクワラル緑》も次の如く耳元へ囁いては去っていく。

「……御武運を」

だから、運とかそういういった不確定要素に頼るべきではない——とアーシルは余程言っておきたがったが、やめた。

ただでさえ、声に出さずに祝詞を唱えるのは難しいのだ。いくら、言語が内的思考の手段とはいえ、発声器官と矛盾する論理思考を並列できる程、アーシルは器用ではない。

予想通り、テイルⅡナⅡノグの勇士たちが、退く帝国官僚を追おうとする。

すかさず、アーシルは両腕を左右に伸ばす。無発生式のまま、言語巫術を簡易発現。

アーシルの裾から、まっすぐにピンと伸びた《アルリアスラウ青》の神御衣が遮る。

「これは賢者様が姫様に使ったという……？」

「違うっ！ 避ける！ これはあれの原型の……」

あのチーシュイが驚く面々に警告する。

もう少し、引きつけたかったが、やむを得ない。

アーシルはそのまま横に薙いだ。

手ごたえはさほどない。だが、既に巫術によって、神御衣は鋭利な刃となっている。

男達の身体は真つ二つだった。

彼らにしてみれば、冗談のような、悪夢のような、光景のはずだった。

しかし、ここまで生き残ってきた戦士の一群は、それでも恐慌には陥らなかった。

引っかかったのは、三名だけだ。残りの男達はすぐさまアーシルに刃先を向け直す。

だから、アーシルも冷静かつ迅速に次の一手を打つ。

根語ネの単語と文法シヤに夏語単語を一部挿入した【魔女】謹製巫術用言語試作版だ。

『「……逢魔が時の生命いのち、大禍時の息吹いぶき。我統しめすは闇の食国おすくに。疾く疾く来たれ、黄昏たそがれの奴やつこ。我掲げるは白き腕ただむき。包みて、宿れ、忌まわしきもの』」

彼らは怯まず、得物を投げつけ、あるいは斬りかかってきた。巫術師としてはともかく、武芸者としては三流なアーシルが彼らと打ち合っても、勝ち目はない。

称賛しよう。テイルⅡナⅡノグの勇猛なる戦士たちよ。諸君らは想定外の事態においても即座に最適手を選択していた。

正直、間に合うか否かで際どいところだった。冷や汗をかいた。

だが、こちらが祝詞を結ぶ方が早かった。

「我が主君、女媧娘々の名において、汝妹に命じる。黒き衣と交わり、暗し刃と成れ……
《招妖幡》」

アーシルの全身から無数の刃となった神御衣が放たれる。

当然、上着にしていた長衣は散ってしまい（ごめんなさい。ご主人様）、また下着であった神御衣は刀身形成のためにその面積を減らさざるを得ない。

有り体に言って、アーシルは半裸である。

その分、両腕から二本伸ばしていただけたの時は桁違いの猛攻になりえる。

「避けるっ！ 武器で防ぐなっ！ 大地に伏せるなっ！ 斜め後ろに避けるんだっ！」

チーシュイは必死に警告する。

しかし、彼らは経験豊富な戦士である。それ故に条件反射で動いてしまった。

変幻自在な触手として、動き回る神御衣の刃に対応できなかった。

ある者は手にした槍で触手を受け払おうとした。だが、その槍に絡みついた触手に槍を奪われ、次に串刺しにされた。

ある者は伏せる事で触手をやり過ごそうとした。だが、途中で触手はその軌道をカクンと変え、次に串刺しにされた。

残り七名中、六名が似たり寄ったりの結末を迎えた。

結局、チーシュイのみが残った。

だが、それ以外の面々は肉片となり、周囲を鮮血に染めていた。

「これが……本物の《招妖幡》……！」

「なるほど。御存知でしたか？」

「……だから、俺だけが生き残れた……！」

巫術の概要を聞いていた。巫術の模倣を見ていた。故に回避が出来た。

しかし――、

「では、この刃が神御衣——精霊結晶で編まれた特殊繊維である事もご存知でしょうか？」

「ああ、その手の精霊結晶はこんな刀では、斬れない」

諦めの言葉――。

そして、光が輝いた。

```
if (str.equals("farce")) {  
    System.out.println("
```

マジュヌーン【Majnun】 名詞

1：発狂した人間。

2：転じて、愚者。

……それが最も古い記憶にある自分の呼び名だった。

何故、自分がそんな風に呼ばれていたのか、おぼろげな記憶からははっきりしない。だが、当時を知る者によれば、幼い自分には奇矯な言動が目立っていたからだという。

その一例が『僕、なんで奴隷なの？』という問いだった。

推定三歳だった頃の自分に深い考えがあったわけではない。

動機は純朴たる空腹だった。空腹で空腹で仕方なかったから、自分の持ち主であった奴隷商人に訴えたのだ。

——「お腹減った。お腹減った。お腹減った。減った。減ったお腹。減ったよーっ」

奴隷商人はそれなりに紳士的な対応をした。己が所有物なのだという自覚に欠けていた自分に対し、怒声で『お前は奴隷なのだ！』と言い聞かせたのだ。

——「ふうん、僕、奴隷なんだ？」

——「当たり前えだろっ」

——「じゃ、僕、お腹減った」

——「お前やつぱり馬鹿か……いや、そうじゃなくて、それ位、我慢しろ！俺達だつてやりくり苦しいのに、奴隷にまともに食わしやる飯なんてあるかっ！」

——「ふうん、僕は奴隷なんだ？」

——「……さつきも言ったぞ、その台詞」

——「でも、奴隷って、お腹いっぱい御飯を食べられないんだ？」

——「ああ、少なくとも、手前みたいな奴はな。ほら、さっさと檻の中に……」

——「じゃ、僕奴隷やめるー」

——「阿呆かっ！ やめられる訳ないだろう！」

——「どうして、やめれないの？」

——「おまえが奴隷だからだよ」

——「じゃあ、どうして、僕、奴隷なの？ ねえ、どうして、どうしてえ？」

——「……」

今にして思えば、かつての自分は実に幼稚で滑稽で愚鈍で——しかし眩い程に誇り高い男だった。

その後、偉く痛い目にあつたのを覚えている。

目が覚めると父——本当は養父——の姿があつた。

父はまず暴行を受けた少年に同情し、次にその少年の愚かな気高さに感動したらしい。その日の内に自分は父との養子縁組を済ました。

ついでに《愚者》^{マジユヌーン}という蔑称を気にした父の意向で、ディアウスという諱^{イスマ}とイブン^{ナサフ}ラフマーンという父称を自分^{アイチエン}は手に入れた。

そして、自分の生活は、世界は一変した。

それは自分にとって、最も豊かな数年間の始まりだった。

父の屋敷に連れて行かれた自分は、若く美しい『母』にいきなり服に脱がされた。何事かと思つたら、風呂場で身体を隅々まで洗われた。気がついた清潔な衣類を着せられ、食べきれない程の食事を与えられた。しかも、父は将来のためにと家庭教師まで与えてくれた。しかも、それが毎日当たり前のように続くのだ。一年もしないうちに悲惨な奴隷時代の思い出は遠い幻でしなくなっていた。

…温かった。

衣服が温かつたのではない。食事が温かつたのではない。

父母の愛が何よりも温かつたのだ。

そして、七つの時、彼女と出会つた。

それは自分にとって、最も幸せな五年間の始まりだった。

あの日、いきなり、一人の少女——阿翦^{アイチエン}が自分たちラフマーン一家と同居する事になつたのだ。ちなみに阿翦^{アイチエン}のそれ以前の境遇はよく知らない。本人も覚えていないのかもしれない。ただ、当時の中原は戦乱で全てが荒れ果てていた。おそらく、自分と似たような境遇だつたのだろう。

違つたのは、自分が義父の慈悲によって救われたのに対し、阿翦^{アイチエン}は自身の才覚によって見出されたという点だ。父が阿翦^{アイチエン}を養う事になつた直接の理由は、帝国丞相からの要請だったが、それはつまり、あの帝国丞相が七歳の阿翦^{アイチエン}を認めた事を意味するのだ。

阿翦^{アイチエン}と自分が『姉弟』のように育つたのはそういう事情による。阿翦^{アイチエン}と自分は一つ屋根の下で、共に育つた『姉弟』だった。そう…互いに正確な生年月日が不明であるにも関わらず、『兄妹』ではなく『姉弟』だったのだ。

だが、その頃の自分は阿翦^{アイチエン}と共に学ぶ楽しさに夢中だった。互いの力の差に気付かないほどの愚か者だった。

そして、十二の時、彼女と別れた。

二人で《ウルル》に入ったからだ。共に学生寮に入り——親の庇護を離れてしまえば、阿翦アイチエンと自分の力の差は嫌でもわかってしまう。十五、六の頃にはそれでもまだ吠えていたが、それも長くは続かなかつた。

結局、二十歳の時には《ラフマーンイブンラフマーンの息子》ナサブという父称も捨てた。偉大な父の名を汚すことに耐えられなかったのだ。また、忠友チーシュイの心を得たのもこの頃だ。もつとも、前述の通り、この経緯は実はよく覚えていない。当時の自分は苦しかったのだ。自分が厭しい現実を何一つ知らぬ子供だったと認める事が、幼き日に見た夢が幻でしかない悟る事が……。

だが、重ねた年月はその苦しみすらも摩耗させていく。

そして十年——三十歳の自分はここに這い蹲っている。

嘘だ。こんなはずじゃなかった。僕はまだ何一つ成し遂げていない。僕の人生はこんなものじゃない。こんなつまらないところで終わってたまるか。そうだ。こんなの『本当の自分』ではない。

——では『本当の自分』とやらを見せてやろう。

```
• “);  
• }  
• if (str.equals("true")) {  
•     System.out.println("
```

マジユーン【Majūn】 名詞

1…発狂した人間。

2…転じて、愚者。

……それが最も古い記憶にある自分の呼び名だった。

何故、自分がそんな風と呼ばれていたのか、おぼろげな記憶からははっきりしない。だが、当時を知る者によれば、幼い自分には奇矯な言動が目立っていたからだという。

その一例が『僕、なんで奴隷なの？』という問いだった。

その後、偉く痛い目にあつたのを覚えている。

目を覚ますと遠くで金持ちが笑っていた。

馬鹿は要らない。特に無能なくせに身分をわきまえず、気位だけは高い子供など最悪だ。

そんな事を言っていたような気がする。

奴隷の中には賢い少女がいた。

少年がほのかな恋心を抱いていた少女だった。

奴隷商人は迷わず金持ちにその少女を推薦する。

するとあっさり少女は金持ちに買われていった。

おそらくそれが少女の幸せだったのだろう。幼いながらも能力を見出された以上、暖衣飽食は約束されているのだから。

二十歳の頃——奴隷のままの自分には年齢の感覚は乏しいが、多分その位の年頃——には、自分でそう納得できるようにになった。片想いのまま終わった初恋への慰めでもあった。いや、最初の恋であるだけでなく。最後の恋でもあるだろう。

死ぬまで単純労働を繰り返すだけの鉱山奴隷に、女性の影などあるはずもない。

自分の前に一人の少年奴隷が現れたのはそんな頃だった。

その少年奴隷は齡十二と幼くはあったが、鉱山の過酷な肉体労働にもよく耐えた。

さらに彼は、初恋の少女と同じ東方系の顔立ちだった。自然と親近感が湧き、兄のように色々面倒を見てやろうと思った。

だが、ある剣闘団の一座が立ち寄った時、その少年もまた買われていった。

何でも少年は剣闘士としての才能を見込まれ、その一座で育て上げられるらしい。

自分には声もかからなかった。少年と違って、既に臺とが立っていたからだ。

数年してから、剣一本で這い上がった男の話聞く。

何でも大きな剣闘大会で九十九人抜きを成し遂げ、帝国騎士として、この世の栄華を極めたという。

祝福する気にはなれなかった。

万が一、彼があの子の少年だとしても、既に自分の事など覚えてもいないに違いない。

自分はもう三十なのだ。

単純な上に過酷な肉体労働を繰り返し、栄養失調のまま時を重ねたので、手足は皸かさに覆われ、目も悪くなっている。最近腰痛が辛く、そのせいでまた作業が遅いと鞭で打たれるだけの一日が始まる。

文字を書く事はおろか、読む事もままならない。

だが、妄想に耽溺する事は出来る。

だから、最近自分を主役にした冒険譚を想い、己を慰めている。

……この記憶はなんだ？

——真実だよ。賢者や魔女がその生涯を賭けて追い求めようとする真実だ。

だったら、これまでの記憶はなんだ？ 義父に拾われ、阿翦と共に過ごした日々は？

——貴様の妄想だ。

ウルルに入った事は？ チーシュイと出会った事は？ テイルⅡナⅡノグでの戦いは？

——貴様の妄想だ。

全部が全部妄想だと？ 今までの努力も苦悩も、わずかながらの成果すらも？

——おかしいとは思わなかったのか？

——何の能もない生意気なガキをわざわざ養う金持ちがいるか？

——人類史に名を残すような尤物が幼馴染の少女などという事がありえるのか？

——剛毅木訥で眉目秀麗な勇士が奴隷として自分に仕えてくれるのか？

——そもそも、世界帝国の最高学府に在籍できるだけの才覚がお前にあるのか？

——そして、その帝国への反逆に何万という辺境の民が付き従ってくれると思うのか？
………いや………ないな。

考えてみれば、あまりにも出来過ぎている。

能なしの僕は死ぬまで、奴隷として、鞭でうたれ、働かされ、そして、死んでいく。

これが真実だ。

——そうだ。それが真実だ。弱者に救済などない。無能に栄光などない。

——それを否定するものは、悉く妄想に過ぎん。

ああ、そうなのか。そうだったのか。

これまでの僕の人生はすべて僕の妄想の産物だったのか。

だとしたら、僕は……。

……僕は………。

……**凄げーよ俺、最高だ。**

今まで俺はあの魔女を追いかけてきた。でも違う。違ったんだ。

そんなものではない。俺は既に一つの世界を創造していたのだ。

俺は神にも等しい男だったんだ。

人は神になれる。いや、初めから心の中に神を持っているんだ。

神は我の内、人の中に在^ま在せり！

——…：…：今度は逃避か？

「当然だな。あらゆるシステムは人間の幸福のためにある。『真実』や『現実』というシステムもその一環に過ぎん。そのシステムが人間を幸福にしないのなら、それは廃棄されてしかるべきだ。そんなこともわからないのか。ばーか、ばーか」

——現実を選択可能なものでは……。

「甘えるな！　そうやって競争原理から目を背ける者に未来はない！」
言いながら、どうもこいつの勘違いを正さねばならないと気付いた。

人間を幸福にできないものは例外なく無能なんだ。

そんな無能の分際で努力もせずに、主張ばかり、言い訳ばかり……最悪だな。

何もできないなら、いっそ喋るな。黙っている。

ちよつと考えればわかる話だ。

自分・都合の悪い現実・唯々諾々と従うヘタレ野郎なんて、いるわけがない。

「俺を幸せに出来ない。それは罪だ」

以前、上から見下ろしていると言われた事があった。

今思えば、その通りだったと思う。何故なら、それが自分に必要だったのだから。

上からの目線こそが必要だったのだ。その観点があったからこそ、自分はある時、「何故、

僕は奴隷なのか？」と尋ねることができた。疑うことが出来た。それは優しい世界ならば、

必要なことなのだろう。実際、両親の庇護の下にいる時、アル・イクシルは疑うことなど

なかったのだ。

だが、世界は優しくなかった。

「そして、人を幸せに出来ないものを、無能と呼ぶのだ」

そうだ。世界は優しくなかった。残念ながら、既存のシステムは無能だったのだ。それ

を責めるのは残酷かもしれない。どんなものにも制度疲労というのはあるのだから。

「だから、逃避せねばならない。世界が俺を不要だというのなら、俺一人許容できない無

能だというのなら——極めて残念だが、面倒くさくて嫌になってくるが——しかし、やは

り、逃避せねばならない」

それが生きるための必要条件であり、義務なのだから！

「故に最愛なる我が幼馴染の口癖を送ろう——『無能は死ね！』」

そして、マジヌーン・アル・イクシル・ディアウス・イブン・ラフマーンは覚醒する。

・
（；）

魂振歌が聞こえた。

それはある種の四弦音階だった。二種核音が完全四度をなし、そこに一つの間音がある。

——…阿翦が《クシナダ旋律》と呼んでいたあの祭り歌だ。

この四弦音階は現行人類にとって極めて始原的、普遍的な旋律らしい（例えば、アツザ

フルでも間音三つの四弦音階を以って、完全音組織シユステマ・トレイオンとしている。

それ故か、精霊との濃密な情報連結をした者は、しばしばこの幻聴・に襲われるという。もともとアルルクシルはそれを噂話にしか思っただけでなかった。音痴だし、そもそも干渉力に乏しいアルルクシルにとって、精霊との情報連結は常に希薄なものであった。言語巫術が何とか形になっているのは、祝詞や言霊といった小手先の技術で精霊の使役を効率化しているからに過ぎない。精霊との繋がりそのものは、実に貧弱なのだ。

だから、その『精霊の囁き』は実在するにせよ、無縁だと思っていた。

しかし、アルルクシルは感覚はたしかにその四弦音階テトラ・コルドを捕らえていた。

気がつくのと、その右手にはようやく……ようやく、応えてくれた藜杖ヘカムヌがある。

そして、その背には六対の再帰性疑似人格生長起点——光の翼があった。

アツザフル帝国首都ムンダペレ郊外にて——。

アウワルアウワルの雌奴隷は主人の前に跪いた。

「四番目からの報告です。光源は北北東に千六百ファルサク（約一万キロメートル）、テイルテイルナナノノググ周辺と確認しました」

「あら。じゃあ、アシルはあの光に飲み込まれちゃったのかな？」

「……『外部演算因子との情報共有による人格構築型連鎖性精霊干渉法』ですか？」

「ええ、いわゆる『神憑り』カムガカリよ。私の方でも否定すべき要素を見出せなかった。二次・三次干渉力間係数が1を超えている。賭けてもいい。あのディアウスの光こそ第四世代巫術師の嚆矢となるわ」

「ディアウスっ？」その忌むべき名に思わずアウワルはたじろいでしまった。「あの光はアルルクシル・ディアウスなのですかっ？」

「ええ。自己相似的に生長する誤謬で干渉紋も大分味付けされているから、あなたにはわからないかもしれない。でも私にはわかる。この拡張干渉紋の鑄型は間違いない。ディアウスよ。長い付き合いだもの。私があの手を誤認する事はありません」

主人の口数は日頃には比べ多かった。愉しんでいる証だ。

「……そうね。そう言った意味でも感慨深いわ。いつも私の後ろを泣きながらついてきたディアウスが、ようやく私に先んじたんだから」

まるで弟の成長を喜ぶ姉のような顔で微笑む。

そして、天上の光を見上げ、真理の探究者として呟く。

「くくくつ、素晴らしい」

すぐに詳細の分析を——と振り返ったところで主人は眉を顰めた。

「……何、その顔？ あなたは人類の偉大なる一步を喜べないというの？」
「どうやら、表情に出してしまつたらしい。」

そのせいか、主人は高潔なる勘違いをした。

「言っておくけれど、悔しいのは私も同じよ。これで三週間後に予定していた実験はすべて延期だもん。だけど先を越された以上は、その成果を吟味し、追試の精度を上げる事が、後に続く我らの責務でしょ」

「……違います」

と、これにはアウワルも抗弁せざるを得ない。

「あの男は悪運が強い。土壇場でこんな奇跡が起こつて一発逆転だなんて……。あんなに頑張り屋だったアーシルがかわいそうだな……と」

人一倍、生真面目で努力家だった少女の顔を思い出し、アウワルは暗澹としたのだ。

今思えば、自分も彼女のことが好きだったのだろう。

ところが、主人は冷笑を浮かべた。

「そうやって、恥ずかしげもなく不幸・自・慢・をしているから、ディアウスに遠く及ばないの
でしょうね。アーシルも、あなたも」

「……不幸自慢……ですか？」

その言葉の意味がわからなかった。そもそも、主人がああ男をディアウスなどと名前イヌムで呼ぶこと自体が腹立たしいのだ。

「『妹のアーシルはあんなに頑張っていたんです』ってさ。じゃ、ディアウスは頑張つていなかったの？」

「それは……いえ、それではご主人様はあの男の努力がアーシルに勝ると？」

「知らない。わからない。興味もない。興味があるとすれば、どうしてあなたが自分の物差しで他人を量れると思ひあがっているのかよ」

「……」

「わからない？——あの『神憑り』現象自体は断片的とはいえ、【私たち】が生まれる前から、何度も確認され、文献にも残されていた。二十年前にはディアウスもその現象を説明するための仮説をいくつか話していたわ。その時は子供じみたものだったけれど、十年前にはその仮説を立証するための条件をすべて満たしていたわ」

「……これもあの男なりの努力の成果であり、必然である？」

「因子が揃つてからと考えるても十年よ。もつと早く発現してもおかしくはなかったけれど、死ぬまで発現しなくてもおかしくはなかった。仮説そのものが間違っているんじゃないのか？ 自分は無為に時間を浪費しているんじゃないか？——そういった不安に耐えてきた過程を努力と美化し、他人に対し不幸・自・慢・をすることを私の幼馴染は好まない」

それがこの一番目や十番目との差だ。

「いくら駄目人間でも流石に奴隸とは格が違うってこと」

率直に言ってやると、苦い顔をした雌奴隸は俯いた。昨日までなら、もう少し玩弄して、愉悦に浸るところだ。しかし、今日はとてもそんな気分になれなかった。

下等な連中の相手をしている場合ではないのだ。

——【私たち】が認知していた《神憑り》とは、幾つか相違点がある。

精霊を演算素子に使っているだけで、あれは巫術で構築した疑似人格に過ぎない。

ところが、拡張された干渉紋が鑄型であるディアウスの形をとどめているのだ。

つまり、ディアウスの自我は保たれていると見ていい。これは彼の干渉力が生来ひ弱だった事、特に精霊との情報共有率が著しく低かった事が関係しているのだろうが……。

——かつての《巫女》たちは疑似人格を形成した時点で、その疑似人格に肉体の主導権まで握られてしまった。結局のところ、第二代巫術師などは神々の奴隸でしかなかったのだ。しかし、あのディアウスはその意味でも奴隸ではない。

何しろ、今のディアウスは神意に従っているのではなく、神意を従わせているのだ。

己に神の恵みなくば、自ら偶像を鑄造し、崇拜し、挙句の果てには使役する。

よほど一人遊びが好きなのね。あのコも。

「……それともそれこそが人間の須らくあるべき姿なのかしら？」

夜を重ねたような髪がたゆたい、暝天の黒衣が棚引く。

髪は地に伸び、三つ目の足の如く、衣は天に向かい、八重に別れ、八咫に広がる。

言うまでもなく、内なる昂りに精霊が反応した結果だ。

自慰に耽る賢者の姿を思い出し、魔女は興奮を抑えられなかったのだ。

その姿は黒い鳳凰、あるいは大鴉か、いずれにせよ、翼あるものの有り様だった。

ボウデイツカは戦慄していた。

その視線の先はアル||イクシルの姿がある。

投石で倒れたかと思うと、例の役に立たない藜杖が突如光を放ち始めた。

その光は白く輝く筋を成し、葉脈のように伸び広がっていく。

異様な状況は、功績をあげたはずのアツザフル兵士を惑乱させ、逃走させた。

一方の葉脈は、紋様とも呪飾とも呼べる形状でアル||イクシルの全身を覆う。

特に頭頂部に辿り着いた一群は、そこにしばらくとどまった後、糖蜜に吸い寄せられる

かの如く、背中の外套を侵食していく。

現代人ならば、即座に『電子回路』という単語を連想する光景だ。

だが、精霊の住まう世界で十六年を生きてきたボウディッカには別の感想を抱いた。

——これは通常の精霊との情報連結とは明らかに違う。

精霊はヒトの脳新皮質に最も多く寄生し、反応し、情報連結を行う。次点は脊髄から退化しきった尾骨、そして、最も器用な運動を行うために神経が集中している両手の指先である。だが、通常はバラバラな動きを示す精霊も、寄生主体たる人間が言語巫術を用いる時などは、明確な指向性を伴う。その規則正しい精霊の配列状態を『展開』と呼ぶ。

今、アルイクシルと情報連結している精霊達はその『展開』された状態に近い。これ自体は全く不可思議ではない。アルイクシルは知識人であり、往々にして、知識人は言語巫術を習う。実際、アルイクシルがボウディッカを破ったときも、言語巫術を使っていた（というか、精霊の指向性が不十分な観念巫術では、大した出力は出せない）。

違うのは、精霊が規則正しく配列しながらも、その反応の最大出力が脳や脊髄などの中枢神経系ではなく、その外側にあるという点だ。むしろ、アルイクシルの中枢から離れる程に、反応が強くなる。これが不思議だった。普通、精霊の反応は人の思考中枢から離れるほどに弱くなるというのに……。

「既知を超えたネットワークの展開——『超展開』とでもいうか？」

その結果、アルイクシルの干渉力が膨れ上がっていたのだ。

たしかに干渉指向性は中々だったとはいえ、この男の基礎干渉力は貧弱極まりなかったのだ。アルイクシル自身もそれを認めるが故に小細工を弄し、乏しい精霊の力を騙し騙し使っていたのだ。それくらいささやかな力だったのだ。

そんな狭量極まりなかった干渉紋が……。

「積層型立体干渉紋……しかも肉眼観測が可能な段階まで活性化されている……！ 何でこんなに膨れ上がっているんだっ……？」

活性精霊に侵食された神御衣カムミンの外套は、その姿形を変え、六対に枝分かれする。

枝分かれした十二の端末から綾なす光が自己相似的に生長していく。

唐突にボウディッカは今まで自分が散々足蹴にしていた神像を思い出した。

——これが本当の『アンドラス神』の姿？

「おお！ では、先程のは精霊を外部演算因子として構築された疑似人格——『神』との対話か？」

突如、アルイクシルが目と口を大きく開いた。

「お、おい。何を言っているんだ？」

「僕が使えないこの『カムヌ』の杖を持ち歩いていた理由ですよ。そうですね、自分の中で考えをまとめるためにも、ちよっとお話しましょうか」

そう言って、アルIIイクシルは立ちあがると、教師の口調で語り始める。

「人間一人当たりの干渉力には上限があります。人それぞれ筋力の強弱があるように、人それぞれ干渉力にも強弱があるのです。しかし、筋力と同様、干渉力にも強かれ弱かれ上限がある。しかもそれは後天的に育成することが実に難しい——では、これを人工的に増やすことができないか？」

「だ、誰でも一度は考えるな」

「しかし、実現は難しい。数多の手法が考えられ、そのほとんどは失敗に終わりました」

「……例外があるか？」

「はい。その一つがかったの《巫女》たちが行っていた《神憑り》です」

「第二世代巫術の話かよ。信用できるのか？」

アルIIイクシルは苦笑する。

未だ祭政一致や神権政治の名残の強いティルIIナIIノグ人にそんな事を言われるとは——といったところだろう。

「正直なところ、僕も胡散臭いと思っていました。ですが、少なくとも、幾つかの事例については合理的かつ無矛盾な説明が可能だという結論に【僕たち】も達したのです。すなわち《神憑り》とは『外部演算因子との情報共有による人格構築型連鎖性精霊干渉法』とでも呼ぶべき現象だったのでは——とね」

すなわち、精霊はヒトの精神に反応する。ならば、より多くの干渉力を引き出すためには、より多くの魂を用意すればいいだけの話だ。

一つの方法としては、人間の数を増やせばいいというものがある。筋力と同じように頭数を揃えれば、たしかに引き出せる干渉力は増す。だが、筋力と同じようにその指向性が下がってしまう。

そもそも、そんな集団を維持するのは一苦労なのだ。神権主義者の理想とは違い、現実の人間は精霊から力を引き出すための器ではないのだから……。

……だが、逆に精霊から力を引き出すための人間の精神を用意できれば？

それが《神憑り》の基本理念だ。

精霊から力を引き出すのに必要なのは『人間の精神』であって、『人間そのもの』ではない。干渉力抽出に特化した疑似人格で十分なのだ。肉体も必須ではない。いや、正確には精神を維持するために『そこに肉体がある』と誤認させるだけの疑似信号は必要かもしれないが、それとて、人一人を養うよりはよほど簡単だろう。であるならば……。

「……まさか、ヒトの脳を……！」

「さすがはボウディツカ姫、発想がああ魔女によく似ていらつしやる」

「………海豚や鯨の脳で代用とはいかんのか？」

「そちらについては僕もやって見ましたが、上手くいきませんでした。それにもっとお手

軽な方法がありましたし」

文字通りの神々しさのまま、アル||イクシルは説いた。

「精・霊・に・作・ら・せ・る・ん・で・す・よ。ヒ・ト・型・精・霊・結・晶・細・胞、あるいは精・霊・型・精・霊・結・晶・細・胞・です」

精霊は人間と情報連結する。故にそもそのニューロ||ネットワークはヒトの脳神経に酷似している。ならば、精霊に人間の精神を模倣エミュレートさせればいい。そして、そこに魂があると精霊が誤認さえすれば、彼女達は喜んでその干渉力を差し出す。

その干渉力で精霊を魂に擬態させれば、さらなる干渉力を引き出す呼び水となる。

そうやって、ネズミ算式に魂を増やしていけば、雪ダルマ式に干渉力は増していく。

「……っ！」

反射的にボウディツカは己の軀に目を向けた。

いつ見ても欲望をそそる肉付きであったが……

それが淡く輝いている。

同時に自分の内側から力が抜けていく感覚に襲われ、しかも、その感覚が明らか部位ほど、強く輝いていた。しかも、肌に着けた装飾具の数々もまた輝いている。それらはすべて戦働きのための神器——今風に言う精霊結晶だった。

輝く粒子となった精霊がボウディツカの内外双方から、離れて行っているのだ。

いや、ボウディツカだけではない。敵味方を問わず、生死すら問わず、周囲の人間から、例外なく精霊が漏れ出している。ただ、ボウディツカは一次干渉力が高く、精霊の体内寄生量が多く、その上、沢山の神器を纏っている身であるが故に、わかりやすかったのだ。程度の差にすぎない。

ボウディツカ程でなくとも、精霊に愛され、神器を持つ者は、皆この異常に戸惑っている。

——なら、我らが女王陛下はもつと酷いことになっているな……。

自分を上回る干渉源たる母の狼狽を想像し、ボウディツカは顔をほころばせる。

と、同時に心にゆとりが生まれ、本来の冷静さを取り戻しつつあった。

これはヒトだけではない。固着した結晶から精霊が剥離しているだけでもない。

人間に寄生する精霊を、禽獣に寄生する精霊を、木石に寄生する精霊を——。

風に宿る精霊を、水に宿る精霊を、火に宿る精霊を、土に宿る精霊を——。

大気から、大地から、森羅万象——ありとあらゆるものから、精霊を集めているのだ。

「……そういうことかよ」

六対になったアル||イクシルの白衣は長く伸びている。ただの外套の時よりも明らかに伸びている。

最早、遠目にもわかるであろう巨大な後光だ。

そして、あれは膨れ上がった干渉力で、それそのものの維持のためにも、周囲の精霊を

無尽蔵に収斂していたのだ。

「あ、無限とはいきませんよ。この惑星に存在する精霊の数は有限ですし、何より精霊の情報伝達率は一・〇未満です。そして、その無限級数の総和は収束するのです。」

何故かアルリックシルは皮肉っぽく補足する。

「そんな簡単にうまくいくのか？ もしそうなら、その《神憑り》カムガカリとやらがもつとポンポン出来てもおかしくないような気がするが？」

「結論から言えば、当初は全然うまくいきませんでした」

「……問題点は洗い出せた——と？」

「どうも、精霊のネットワーク側で禁止しているようなのです。理由は不明ですが、僕が精霊の設計者だったとしても、この手の再帰性干渉はやめさせますね。システム全体が無循環に陥って機能停止する可能性がある。まあ、実際には……」

「待って待って。ネットワークに禁止されているんなら、定期的に強制配信されるセキュリティパッチで……」

その時、アルリックシルは少し残念そうな顔をして、己の藜杖《カムヌ》を指差した。

「情報連結を拒絶するって……、そういう事かよ……！」

ボウディツカは思わず叫んでいた。

以前に教えられ、また自らも確かめた零距离接触状態における情報連結拒絶——。

あれは強力な免疫機能だったのだ。それ故に、精霊総体の命令？をも拒否しえるが、同時に無害な人間や精霊との情報連結も制限されてしまう。

「はい。他の同族との接触を拒む《スタンドアローンひきこもり》であるが故に禁則を無効化できる変異体。

あるいは《エゴ自我》という名の《ファイアウォール心の壁》を獲得した精霊——まさにヒトの似姿」

「嫌いな奴とは口をきかない精霊か……誰にでも股を開き、万人との情報連結を行う他の精霊に比べりゃ、慎み深いともいえるか？」

「ええ、とりあえずは貞操型精霊と呼んでいます。この種の精霊を起点とする事で、本来ネットワークが禁止している再帰性干渉を実現し、疑似人格を大量に生成し、《神憑り》を顕現させようと仮説を立てたのです」

「そして、その仮説を今お前が証明した」

「はい。具体的な手法としては、まず、貞操型精霊の強固な免疫系を突破するために、僕は十年前から——ま、僕らしく力技ですね——余剰干渉力による総当たり……」

「それはいい。聞いても理解できるか怪しいし、何より時間がない」ボウディツカは左右に視線を走らせ——敵兵が惑乱しながらもさすがに近づいてくるのを見て取り——解説を遮る。「だが、これだけは聞かせてくれ。どうしてこの土壇場になって、その力が発現した？ その誤認にせよ承認にせよ、あまりにも都合がよすぎるのは何故だ？」

「……そうですね、そこを説明できない点が汎神論者である《白衣の賢者》の限界でしょ

う。しかし、理神論者である《黒衣の魔女》なら『この現実と呼ばれる再帰制シミュレーション。テッドリアリテイにおける裏技』と呼ぶかもしれません」

「すまん。やはり言っている事がよくわからん」

ボウディツカはきよんとしていた。

そんな彼女をアルリックシルは初めて素直に可愛いと思えた。

——我ながら、気が大きくなっているな。無理もない。僕がこれ程の力を手にしたのは、それこそ生まれて初めてだ。

精霊から吸い取れる抽出力だけではない。精霊を感覚系とする認識力も大幅に拡張されているのだ。これで気が大きくなならない方がおかしい。

これまで干渉力という点でも貧弱だったアルリックシルは、常にチーシューイやボウディツカといった強者に圧倒され続けていた。

それが今や端末となった自身の精霊だけで逆に彼女の全身を内包している有り様だ。

ボウディツカだけではない。アーシルウマイヤと彼女が率いる帝国軍も今や蟻の群れにしか思えない。

繰り返り言になるが、自覚があっても興奮を抑えきれない。

何しろ、最終干渉領域はこの惑星のすべてに広がっている。

この大気に満る精霊の悉くがアルリックシルの手の内にあつたといつてもいいのだ。

その一方で原始的な肉眼には、精霊の威容に震える数多のアツザフル人の姿があつた。

——そうだった。あいつらは敵だ。驕るなよ、アルリックシル。さすがに守護精霊のほとんどは、僕の支配を拒絶している。強大な力を得たといつても、僕は無敵ではない。故に敵を屠らねばならない。

その意思に反応した精霊が光を大気に放つ。

無論、精霊一つ一つの光はごく僅かなものだ。だがそれらも集えば、話が違ふ。

光の粒も集えば、星の輝きとなる如く。

儂い星の輝きも、集えば日の光に勝る。

あの天照らす女神にすら挑めるのだ！

——阿翦よ。君の《イワトゴモリ理論》が正しければ、真空とは無ではなく、負のエネルギーに満ちた海ということになる！ ならば、そこから、質量を引きずり出すことも出来るはずだ！ 立証してやるよ、この僕が君の仮説を……！

藜杖を握り締めたままの右の拳を大きく広げた左の掌と近づける。

そのまま、右手に作った精霊による擬似重金属円盤に、左手から高エネルギー状態の電子線を放つ。すると

——はははつ、《岩戸》が開いたぞ……！

精霊によって拡張されたその感覚を、アルIIイクシルの術学趣味はそう表現した。それは《空孔》や《デイルックの海》とも名付けられるものと近い概念であった。

また、引きずりだした質量はやはり電離気体であったので、電場と磁場で制御収束する。

「お、おいつ！ それ、ちゃんと制御できるんだよな！ とうか、そこで光ってんのが電離気体の塊なんだとしたら……何か、ちよつと飛び出しているぞ！」

「わかってますよ。おそらく封印のための斥力が強すぎるんです。でも、おかしいな。あの計算式で出てくる負のエネルギー解って、てっきり陽子だとばかり思っていたけど……こんなに敏感に陽電場と弾き合うなんて……よつぽど質量が軽い？ 電子程度？ でも陽電荷の電子ってなんだと思います？」

「知るかよつ。とにかくその危なそうな代物はさつさと敵陣へ放り投げろよつ」

「それもそうですね。とりあえず電氣的に安定させるために通常の電子と対にさせ……」「真空中で放つわけではないんだっ。中性化する必要はないっ。多分、電氣的な反発は大気が抑えてくれるっ。頼むから、それをあつちにやってくれっ。絶対危ないって！」

後世の歴史家に『ボウデイツカの極めて優れた生存本能』と讃えられる発言にアルIIイクシルは奇妙な感慨を受けた。

——そうだな。風が味方してくれる。この光を導いてくれる。

故にアルIIイクシルは言霊を紡ぐ。

あの《希望故に道あり》と同じ言語系統の祝詞を歌う。

それはアツザフル語の単語を南方沿岸諸語の文法で編み上げた——が、上層言語たるアツザフル語と基層言語たる南方沿岸諸語が高度に調和し、既に他の自然言語と遜色のない——《賢者》謹製巫術用語完成版である。

「……光よ、今、我らを導け。偽りの工匠、打ち破らんがため。邪悪なるもの、標榜せしもの、其は万軍の主。されど、我が本質は探求者。故に伏せず、屈せず、退かず。この手にあるは、神追い人の杖」

その表現型の原理も《真、明らかなる時》と同じ——螺旋の結界——巻線受動素子だ。ただし規模が違う。

十二枚の翼となった白衣そのものが巨大な螺旋と成している。

この電磁の結界を以って、荷電粒子を収束、加速、投射する。筑波学園都市のTRIUSTAN (Transposable Ring Intersecting Storage Accelerator in Nippo / 日本における粒子の貯蔵と加速を行う置換可能な交差型リング)などに近い発想といえよう。

「『我が名は天空——其が鳴る音は稲の妻。我、振りかざすは真実の旗

《真、明らかなる時》」

高々と掲げた藜杖そのものを巫術による強力な電磁石として機能させる。

精霊の加護なくば、瞬く間に血反吐を吐く雷光の中、駆動鍵となった《カムヌ》を手にしたアル・イクシルは白衣による螺旋条構の目標を設定する。

その視線の先には帝国軍の姿があった。

近接するものは《神憑った》アル・イクシルに惑乱しているもの、全体としては眼科に迫る大軍団としての威容を保っている。

こんな相手には絶対に勝てない。それが現実。それが真実。

誰にも言えなかったが、それが昨日導き出した結論だった。

しかし、だとしたら……

——くだらない。実にくだらない。

こんなものが現実か？　こんなものが真実か？

『汝兄が命は、箱庭に残りし最後の希望。苦難と絶望の中にて、我、そのいと小さき萌芽を知る。育み、慈しみ、いとおしみにて、ここに見上げるは生命の果実、再びの創生』
やはり、自分は愚者ではあっても奴隷ではない。愚者なるが故に、奴隷足り得ないのだ。

——何が現実かは……俺が決める！

故に、アル・イクシルは叩きつけるように《カムヌ》を振り下ろす。

「『蒙を祓い、業を越え、神をも赦して、右手に掴むは知覚の光！《偽、消え去らん》！』」
閃光が放たれ、人海が割れた。

それはまさに悪徳を焼き尽くす神の雷。宇宙開闢にも似た——まさに創世の光。

海の水を割った奇跡の如く——、

地形そのものを変える一撃であった。

茸雲が晴れ渡ると、前方のアツザフル帝国軍に大穴があいていた。

「やはり、この世界の造物主は、墮落した存在、負け犬の超越者——言わば《偽りの神》の類だな。そうでなければ、こんな麻薬の如き奇跡を引き起こしたりはしまい」

思わず苦笑、冷笑、自嘲がこぼれる。

だが、それでいい——とアル・イクシルは思った。

「それ故に僕のような怠惰にして無能、菲才にして卑屈なる者に肩入れする。そして、それでいい。神は阿片であるべきだ。貧しき者の溜め息でいい。力無き者が必然や必定に踏み潰されていくのを傍観するのみの《お偉い神》よりもずっと好みだ。そんな神など無意味だ。無価値だ」

断言して、敵陣を観察する。光の矢で大穴が開いたもの……

——駄目だ。見た目ほど、死傷者はいない。

勿論、数え切れぬアツザフル兵士を屠ったが、万単位の戦力は伊達ではない。むしろ、陣形が乱れたことの方が戦果としては大きいぐらいだ。そもそも、こんな奇跡を目の当たりにしても、戦意の喪失に至らないのだから、アーシルウマイヤの統率力はアルイクシルとは別の意味で神の領域に達している。

「まだだ、まだ足りんぞっ」

ボウディツカも同じ判断を下したらしい。

「ならば、第二射……っ」

そして……、

アルイクシルに感覚の欠落が起きた。

「えっ……」

すぐには理解できなかったが、この肝心な時に《神憑り》は消失したのだ。巨大な螺旋となっていた白衣も、古びた城壁の如くボロボロと崩れ落ちる。幸いにも素になった外套部分は残ったが、これでは第二射など夢のまた夢だ。

いや、それだけではない。物心ついた頃から、ずっと己を包んでいた『何か』が突然なくなった程の喪失だった。

アルイクシルだけではない。周囲の人間は多かれ少なかれ似たような喪失を味わっているようだ。敵も味方も等しく戦闘どころでは——いや、それどころではない。見渡してみると、未だ二本の脚で立っているのはアルイクシルだけだ。他の者はアツザフル人、ティルナノグ人の区別なく、大地に膝を付いている。ボウディツカに至っては完全に平衡感覚が狂って、惨めに這い蹲っている。

「今度は何なんだよ。これは……」

ボウディツカは山刀を支えにして立ち上がりとするが、やはり途中で崩れ落ちた。日頃の彼女からは考えられないが、その瞳には涙が浮かんでいた。

——そうか、基礎干渉力の高い程『重症』なんだ。

だから、この周囲一帯で、最も干渉力の高いボウディツカが最も『重症』で、最も干渉力の低いアルイクシルが最も『軽症』なのだ。その法則とあの喪失が示すところは……。

——この一帯の精霊が一斉に人間との情報連結を解除した？

それなら、この惨状（？）も理解できる。この世界の人間は胎児の頃から、精霊と情報連結を行い、生理機能を補強し、感覚器官の第六としていた。空気のように当たり前だったそれらをいきなり失えば、まともに立てなくなるのも当然だろう。

アルイクシルのように精霊との繋がりが元々弱い——いわゆる地球人テツラに近い——存在を除けば……。

もつとも、精霊が突如人間を拒絶し始めた理由はよくわからない。

仮説1…あの《偽、消え去らん》の消耗が激し過ぎて、周辺の精霊に人間との情報連結を維持するだけ余力がなくなった。

仮説2…実は精霊の中にもこの《神憑り》を異常として排除するための免疫機能が存在し、それが時間差で発現した。

「まあ、いずれにせよ…：確実なのは…：」

アルルクシルは光を失ったのだ。

ここで少し時間が前後する。

アルルクシルは驚愕せざるをえなかった。

遠目にも目立つアルルクシルは光輪を背負っているようだった。いわゆるブロッケン現象である。実際、波長によって異なる角度依存性を持つ光が後方散乱を起こしているのも間違いない。だが、これではまるで…：。

「——光輝く十二枚の翼」

「そうだ。三十二相八十随形好の一つ——丈光相。いわゆる《覚醒者》の証さ」

そのチーシュイの言葉に思わずアルルクシルは抗っていた。

「愚かな。あんなものは単なる光学現象に過ぎぬ。ご主人様ですら——黒衣の魔王ですら未だ手探りの領域に、たかが白衣の賢者が辿り着くなどありえないわ」

そうだ。そんな事はあるはずがない。智天級はおろか、熾天級すらも超えた、魔王級の神憑りだなんて…：！

だが、次の瞬間、とてつもない衝撃が襲いかかった。

生きているのが不思議な程だったが、信じ難い事にそれでも狙いは逸れていたらしい。

それが《真、明らかなる時、偽、消え去らん》の着弾だった。

爆風に身をかがめながら、しかし、アルルクシルは状況確認を怠れない。

極短波長の電磁波を大量に確認。反射的に防御形態へ戻した神御衣による精霊の加護がなければ、遺伝子損傷が洒落にならない放射線だ。しかし、これだけの極短波は軌道電子の遷移起源とは考えにくい。原子核内のエネルギー準位の遷移起源に近い。いや、というよりもこれが…：

「…：これが陽電子砲だっていうのなら、ちまちま霧箱で実験を繰り返しているラービウ姉さまは何なのよ…：？」

最早アルルクシルは童女だった頃のように泣きたい気分だった。

だが、さすがにそれは許されないと自身に言い聞かせる。

激風が落ち着くの見計らい、勇気を出して、立ち上がり、目を開く。

その光景にアーシルは再び崩れ落ちそうになった。

手塩にかけた帝国軍の中枢にごっそりと穴が開いていた。

あの《緑》も含めて、すべてが灰燼と化したのだ。

そこへ何故か平然と立ったままのチーシュイが声をかけてきた。

「これで理解出来たろう。我が君——アルⅡイクシル・デアウスこそが魔王だ。」

魔女アルⅡイクシルのような只の二つ名とは違う——真の叛逆者なんだ」

これは帝国の秩序への叛逆者——という意味に留まらない。

弱きものは肉となり、強きものはそれを食む。それは世界の摂理だ。それがどうにもならない現実というものである。だが、アルⅡイクシル・デアウスは

「そのどうにもならない現実そのものへの叛逆者なんだ」

「……あなた何を言っているの？」

「傲慢を司る悪魔にして、原罪の墮天使。太古には光り輝く十二枚の翼を背に、絶対者の側に在ったもの。上古には弥初人いやはつびとに智慧という名の禁じられた果実を齎し、それ故に超越者に放逐されたもの。かつては天に在り、今は地に墮ち、それでもなお、高みを目指すもの。自らを生け贄として、人に真の光を捧げようとするもの。——言わば、真理を探究せるものたち、全ての始祖」

アーシルならずとも、チーシュイを知る者ならば、眉を顰めるだろう。

「ギリシャ神話におけるプロメテウス、エノク文書におけるアザゼル。あるいはアステカにおけるケツアルコアトル、マヤにおけるククルカン。ひよっとしたら、ワークⅡワークヤマトノオロチにおける八岐大蛇やシーナⅡスターナにおける蚩尤しゅうなども含まれるかもしれない。そして、アブラハム系一神教群においては——いや、固有名詞に拘るのは愚かだろう」

この物言いは奴隷剣闘士上りのチーシュイのものではない。

「インドにおいて《覚醒者》と呼ばれた存在だよ。認識主義の語る《悪しき創造主》に抗い、智慧の光による覚醒を促すもの——それは人類の意識の底に等しく眠っている存在である。故に、その呼び名は数え切れない」

ならばこれは……、

「最初の人間、始祖叛逆者、根源探究士、弥初イヤハツノカムオイビトの神追人——すなわち《カムヌ》だよ」
……これは精霊の囁きというべきものなのか？

元々、こがチーシュイという男は莫大な干渉力を誇る。

だが、干渉力とは精霊に干渉する力であると共に、精霊に干渉される力でもあるのだ。

そもそもあの爆風の中、巫術の素養がないはずのこの男は何故無事なのだ？

精霊に守られたから——としか、考えられない。

情報共有率の高さも考えれば、最早、この男の一挙一答が既に……。

その時、光が途絶えた。

遠方でアルIIイクシルの纏っていた輝きがいきなり消え去ったのである。

度重なる激動にアーシルは戸惑いながらも顔を綻ばせた。

原因不明とはいえ、アルIIイクシルの《神憑り》は終わった。あの化け物じみた干渉力はなくなった。したがって、陽電子砲の第二射もあり得ない。

希望の芽を見たアーシルは素早く左右に目を配る。兵力は半減し、隊列は乱れているが、まだ崩れてはいない。そして、このアーシルウマイヤは生きており、命令系統は活きている。もはや、《緑》アルIIイクシルを初めとする予備系統は期待できないものの、帝国軍全体はまだ死んではない。

「これなら……っ！」

「いや、問題ないさ。いずれにせよ、あいつがいるなら、あいつのためなら、俺は……」

そう嘯き、チーシュイは既に折れかけの大刀を構える。

——**仮説3…アルIIイクシルよりも精霊への命令優先性の高い者が現れた。**

赤黒い血糊と錆がボロボロと剥がれ落ちていき、その内側が仄かに青白く輝く。

光は水銀のようにその形を変え、水黴のようにその大きさを膨らませていく。

絡み合う雌雄の蛇の如く螺旋を描いた後、その疑似流体金属は新たな刀身を成す。

正体を一目で看破したアーシルの眼力は流石と言うべきだったのだろう。

「結晶細胞っ？ そんな……精霊の気配はまるでしなかったのに……？」

「そりゃそうさ、これも情報連結を拒絶するからな」

「情報連結を拒絶する精霊ですって……？」

その結晶細胞が成した形は片刃の《刀》ではなく両刃の《剣》だった。

この世界では《剣》は貴人の象徴である。法的規制はなくなっていたが、一介の奴隷が持ち歩けば、無用の揉め事を招くと『刀の鞘』で隠していたのだ。

だが、今や何も隠すものはない。

電子回路に似た葉脈が、精霊による神化粧カムケツイが、チーシュイの全身を覆う。

そして、龍と雫を象った奴隷の——勇者の剣が輝く。

「蒼き霊剣《ナーガールジュナ》……！」

一目で看破する教養がある辺り、やはり彼女は貴門の出身らしい。

「貞操型精霊結晶の——かつて狂王マルドゥックを神去らせた勇者の剣をどうして？」

「変な女に貰った——《賢者》ブツダの覚醒を守護するのが《竜王》ナーガの役目だって言われてな

「変な女？」

余談になるが、この時の彼女の察しの良さは特筆すべきものがあつた。一瞬だけ、考え込んだものの、すぐに堅実な推測を口にする。さすがは魔女の婢というべきだろう。

「それを勇者フアティマ様から直々に受け取ったと？ 現行四種の貞操型精霊のうち二つまでもが、この辺境に集い、しかも、ほぼ同時に発現？ いや、共鳴した？ 馬鹿な馬鹿な馬鹿な、そんな都合のいい話があつてたまるか！」

チーシュイは嗤った。「……同類だよな」

「同類？」

「俺もあんたも所詮は奴隷に過ぎんということさ……」

その一言で狼狽続きだったアーシルの顔付きが変わつた。

「口を慎みなさい。同じ奴隷でも、私のご主人様と貴様の飼い主とは雲泥の差がある」娘は己の誇りを譲らなかつた。だが、奴隷の勇者は穏やかに誤りを正す。

「そういう意味ではないさ。俺もあんたも【現実の奴隷】だ——という意味さ」

「何ですって？」

「あるがままの現実を受け入れてしまふ。与えられた初期条件に、世界の理ことわりに従つて生きようとする。今の台詞がその典型だよ。そんな『都合のいい話』は存在するはずがない。なるほど、それが現実だ。……俺もそう思う」

「……当然よ。世界は、現実は、不条理に満ち満ちている。それでも、我々は現実を受け容れねばならない。現実と戦つていかねばならない。生きていかねばならない」

「俺も同じように生きてきたさ。だが、あいつは——アルイクシル・ディアウスは違つた。現実に『都合のいい話』がないのなら、現実は『都合の悪い話』ばかりということになる。そんなモノを認めることに何の利益がある？——とほざきやがった」

「だから、その現実から逃避するというのは？」

「そうだ。そして、至気いと高き我が君はその逃避を完遂したのだ。アルイクシル・ディアウスは今、この瞬間、無能である自分という現実そのものを拒絶した。自分に『都合の悪い話』を断固認めなかつた。……器が違うよな」

「そんな屁理屈、認めてたまるか！」

「おいおい、あんた、さつき『現実を受け容れねばならない』と言つたじゃねえかよ——受け容れるよ、不条理を。認めろよ、屁理屈も。奴隷は奴隷らしく、唯々諾々とさ」

娘の頬に赤みが差した。チーシュイは嘲いが止まらなかつた。

「さあて。ここで、あんたは俺に斬られる。指揮官を失つたアツザフル帝国軍は総崩れ。

ティールナノグ辺境軍は大勝利。希望の未来へいざ進まん。……それだけじゃねえぜ。強者たる帝国軍が弱者たる辺境軍に負けるというのは、異常な話だ。奇跡と言つてもいい。弱者にとっては実に『都合のいい話』だ。指揮官が一介の白衣に過ぎないのもむしろ、声望を高めるな。アルイクシルの名は至弱いとき者たちの耳には心地よく、心には大きく響く

だろう。——さて、救世主伝説の始まりだ」

男は構え、女は黙り、そして、口を開いた。

「……それは、受け容れられない」

「ほう？」

チーシュイは意外に思った。その彼女の相貌は澄み切ったものになっていったからだ。

「……私がここで斬られようが、あの男が救世主になろうが、そんなことはどうでもいい。でもね、私は《アールシルロウマイヤ十番目の雌奴隷》、魔法のはしため婢、あの人の所有物なのよ。ここで私が負ければ、それは所有者であるご主人様の名に傷を付けることになる。そんな現実是我慢ならぬ。——だから、絶対に、受け容れられない」

それは既にウマイヤ奴隷の言葉ではなかった。想い人に尽くそうとする乙女の言葉だった。思わず、チーシュイも心からの笑みを浮かべてしまう。

——そうだ。それでいい。

自分都合の悪い現実には、唯々諾々と従うへタレ野郎なんて、俺だけでいいんだ。

アルルクシルにとっても、チーシュイにとっても、現実には『都合の悪い話』だった。

アルルクシルは外界の環境に恵まれながらも、自己の能力には恵まれなかった。

チーシュイは自己の能力には恵まれながらも、外界の環境には恵まれなかった。

違ったのは、その先だ。

与えられた柵の中で戦うしかなかった《アスライ奴隷》と、その柵そのものから抜け出そうとした《アスライ人間》の違いなのだ。

『《ツフオヤフン招妖幡》っ！』

乙女の衣はその言霊に応え、刃を成して、その奴隷に襲い掛かる。さらに

『《せんねん千年の狐狸精》っ！ 九頭なるちけいせい雉鶏精》っ！ 玉石たるびわせい琵琶精》っ！』

言霊の追加入力。通常の《ツフオヤフン招妖幡》とは明らかに異なる発現形態。誇り高き乙女がその肌が悉く露になるまで、神御衣を——己が持ちうる精霊のすべてを費やす。

数え切れぬ刃が次から次へと生まれ、怒涛の勢いで奴隷の男へと襲い掛かる。

だが、一閃。

「……残念だったな。これが唯一絶対、全知全能、神聖不可侵なる『現実』だ——！」

それは只の一振りだった。

鋼鉄の刀では斬れぬ乙女の刃、だが、勇者の剣はそれを易々と切り裂く。

そして、左手を前に突き出し、右手の剣を逆手に、腰を捻り、重心を落とす。

「消え失せる。我が兵形象水の一撃を以って」

チーシュイはそんな奇妙な構えを取る。人間工学的には不合理な構えだが、これでいい。

《アスライ剣》とは武器である前に祭具なのだ。上古からの呪物である《アスライ剣》は、神々を祀り、天

下らせるための依代なのだ。

しかし、アーシルには冷笑も躊躇もなかった。怯えも迷いもなかった。神御衣は文字通り打ち破られ、ほぼ全裸であったが、それを顧みることすらなかった。ただただ愛する魔女のため、男の咽喉を食い千切ろうと、飛び掛かるのみである。

だが、既に勝敗は決していた。

「ここは弱き者の箱庭たる世、汝の有り様認めること不能^{あたはず}」

——アーシルウマイヤが死んだんだ！

アルリックシルは確信した。

あの後、とにかく動ける者をまとめ、何とか指揮系統を立て直そうと努めていた。

幸い混乱は向こうの方が上だったので、立て直すまでの隙を突かれる事はなかったものの、しかし、やはり戦況の好転には至らない。精霊との情報連結も徐々に回復していったが、それは敵も同じ事……

……のはずだった。

何故か、アツザフル側の綻びが繕われないままなのだ。

帝国軍の集団行動が素人目にもわかるほど鈍くなり始めたのだ。

そこでさすがにアルリックシルも気付いた。チーシュイ率いる別働隊の成果か、あるいは

《真^{クウエリリックヒリ・ウランゴックジテンガ}、明らかなる時、偽、消え去らん》の一撃かはわからないが、とにかく敵の指揮系統に致命傷があったのだ。

であるならば……、

「え、あそこがこうなって、あっちがこうきたらこうして……もしかして、勝てる？」

ダメヅマリで新しく手が生じた時の感覚。

あの時と同じだった。ダメ——好ましくない手が詰まり、死石が化ける。いや、それどころか、活き返った。

『状況が変化すれば、それまで有効でなかった手が新しく生まれる』

まさしく、チーシュイの言葉通りだった。冗談抜きで彼はアルリックシルにとっての

《預言者^{ネヒレイム}》なのかもしれない。が、悠長に考えている場合でもなかった。

「だ、だだだだだ、第四部隊に指示を……っ！」

「ああ、すぐに伝令を用意する」

ボウディッカもこの変化には驚いていたはずだが、アルリックシルほどは表へ出していなかった。幾度もの激変の末に、一時とはいえ精霊に見放されたのだ。おまけにまだ足腰が立たないらしく、プラスに支えてもらっている始末である。プラスは乳房が頬にあたる形になって赤面中だが、ボウディッカにとっては己の足で立っていられない屈辱が過ぎて、

もはや、どうにでもなれという容子だ。

ただ説教臭い事を言った。

「それと賢者様、部下が不安になるような発言は避けた方が賢明かと」

「ああ、その通りだ。『もしかして』などと口にするべきではないね。ありがとう」

「どういたしました。ん？」ボウディツカはそこで首を捻った。「よく考えたら、あんたがあたしへの感謝を言葉にしたのってこれが初めてか？」

「プラス王子殿下、日没までに大勢は決めます。その後は外交ですが、アツザフル本土が動く前に終わらせねばなりません。時間との勝負です。とはいえ、僕もまだ手が離せないので、あなたに一任する事になりますが、できますね？」

「は、はいっ！」

「おいつ、てめえ……！」

野蛮人の女が何やら叫んでいたものの、聞く耳を持たなかった。大体、このアル||イクシル・ディアウスの称賛を受けたのだから、もつとありがたがるべきだ。

——それにしても……。

自分が巻き起こした一連の奇跡は、盤上の碁石をひっくり返したも同然の反則だった。勿論、これは囲碁ではない。人生は遊戯ではない。反則だろうが何だろうが、勝たねばならない。故に躊躇いはない。

だが、結局はこんな結末らしい。

——あるいは最後は人間の手で……ということか？

こんな時でも形而上学的な空論に現を抜かす己にアル||イクシルは苦笑する。

そして、初めは大声で、次に思い付いて拡声巫術で、全軍に檄を飛ばす。

「我らはここに再び神話を紡ぐ！ だが、それは強者を讃え、弱者を蔑む古き神話ではない！ 負け犬たちの支えとなる！ そう、導^{しん}たる夢物語だ！ 挫けた者、届かなかった者、足掻くことすらできなかった弱き者——そんな者たちこそが報われる——現世ではまずありえぬ都合のいい話だ！」

連合軍は包囲から逃げようとしていた。

その逃走経路に選んだのが、帝国軍の間隙——すなわちアル||イクシルの光によって穴が開き、チーシュイの剣によりそれが塞がれる事を遮られた唯一の脱出先。

そこは衝^つくべき帝国軍の急所そのものでもあった。

既に中枢は死んでいるので、そこさえ崩せば、帝国軍は『軍』としての機能を完全に失い鳥合の衆と化する。

一方で、連合軍はここで初めて『軍』として機能した。生きようとする意志が皆の心を束ねたのである。

「いざ行かん、紡ぎ手たちよ！ この戦——数多の語り部によりて、世に満ち溢れ、現実

の絶望に抗う幻想の希望となった時、それが我らの勝利の宴！」

——いける。これなら、いかに帝国軍といえども断点・負担で持たない。

「これが俺の……俺達の……現実逃避だっ！」